

意見が一つになること（合意すること）に、とても抵抗がある。また、「賛成か反対か」や、「この中のどの考えに当てはまるか」のように、自分の意見にはっきりした内容を与えることにも違和感を覚える。これらの思いが、対話の志向を阻むものであることは、間違いない。では、なぜこのように思ってしまうのか。それは、「かけがえのなさとは独自性（個性）のことだ」と考えることに由来している。ここで言うかけがえのなさとは、「自分でなければ言えない意見がある」とか、「自分にしかできない問題の把握の仕方や観点がある」というような意味で、「私の代わりは誰にもできない」というものだ。つまり、他ではないこの私が発言するということに価値があるため、発言内容よりも、「この私が発言する」というように、行為そのものに重点が置かれている。したがって、発言内容に重点をおく（対話をする）檜垣先生には、そうした姿勢が「見当違いのことを述べている」とか「思ったことや感じたことをただそのまま言っているだけ」（10/5）のように思えたり、あるいは、サンデル教授の東大での講義に感じたという、日本人発言者の一貫性のなさに思えるのではないだろうか。

さて、こうした独自性は対話により失われてしまうため、「合意することによって、自分のかけがえのない価値が失われてしまう」と感じ、冒頭のような思いを抱くのだ。ここで疑問が生じるのではないだろうか。対話においては対立が強調されるため、互いの前提や信条が明確になり、ゆえに、むしろ独自性が強調されるはずであるからだ。独自性が対話により失われてしまうとはどういうことなのか。私にとっては（つまり、やさしい人間関係においては）、独自性が、すなわち、かけがえのなさのことであった。そのため、「自分にしかできない」や「他ではないこの私」という観点が強調され、普遍性のない絶対的価値が、かけがえのない価値として意味されている。しかし、対話においては、事態が逆である。誰にでも普遍的に通じる意見（合意）を目指すため、誰が言ってもかまわない意見にこそ、かけがえのない価値はある。そのため、やさしい人間関係側からすれば、普遍を目指すという対話の根本こそ、独自性を無くさせるものに思えるのだ。

ところで、普遍性の無い絶対的価値とは、いかにして見出されるのか。普遍性を備えた絶対的価値なら話は早いのだ。なぜなら、普遍的な意見を述べられる存在は、特別な理性的存在であるからだ。また、誰にでも通じる（普遍性を備えた）意見を目指すため、自己肯定感の基盤も安定しており、他者による承認や他者とのつながりも得ることができる。対して、普遍性の無い絶対的価値を見出そうとするなら、異質な他者との関係を絶った精神的な密室状態において、意見を単独に保ち、自らの独自性を守るしかない。そして、やさしい人間関係で、都合のいい承認やつながりを確保するのだ。普遍性がないため、もちろん自己肯定感の基盤は不安定である。そのため、ますます内容無き承認を求めることになる。なぜ内容が無いのかと言えば、もし内容ある承認を求めれば、精神的な密室状態でなくなってしまうからだ。私が哲学カフェの存在に懐疑的なのはこのためである。かけがえのない価値を目指すのではなく、それを誰かによって自分の中に承認してもらう場として、哲学カフェが利用されるのではないか、という不安があるのだ。